論文の和文要旨

論文題目	花嫁は依然として昔と同じ花嫁なのか？：マレーシア・サラワク州の客家共同体における結婚儀礼と女性
氏名	エレナ・グレゴリア・チャイ・チン・フェン

本論文は、マレーシアのサラワクにあるタパー(Tapah)という居留地にいる中国系客家共同体に関する研究である。研究の焦点は女性と結婚儀式である。当研究は、再定住している共同体の中の女性にとって人生の最も重要な局面、つまり結婚についてその変化を探るためのものである。結婚儀式が変わらずに残っているのか、あるいは時間の経過とともに変化したのか、また後者の場合、何がこれらの変化に寄与したのかを見出そうと努めた。女性は結婚の準備において重要な役割を果たし、女性自身がまさに結婚の当日まで準備に積極的にかかわる。以上を考慮して、女性の結婚と儀礼に対する認識について裏付けた。儀式などの進行過程や、婚資・持参金などの重要な結婚の構成に関連する諸問題、そしてなぜこれらが依然として要求されるのかについて論じた。また、多くの若い世代の人々がなぜ村を離れて大都市などの他の場所で働くようになったのかについても裏付けた。若い世代の人々は、もし村に帰ってきた場合結婚儀式の行為に影響を及ぼす新しい考えや思考を持ち帰る可能性のある集団なのである。

従来、サラワクの客家共同体に関する研究は極めて少なく、既存の文献は主として客家の歴史的な成立状況と初期の居住を扱ったものである。客家女性に焦点を合わせた特定的研究はほとんど存在しない。客家である私にはこの情報不

足に関心を持ち、未だ入手できない重大な情報を集めて記録したいと願っている。自分が人類学者でありまた客家女性でもあることから、その欠陥を埋めるべき義務ある立場にあると思う。将来の研究や参考のために、この共同体に関する重要な情報を集め、客家女性の状況を記録して、自分の研究を適切に裏付ける必要性を感じた。みずからが愛情を持って帰属している共同体に関して情報を収集する人類学者として、私は自分の研究のなかで、自分を自身の共同体を研究する部外者として描くのか、あるいは自身の共同体を代表するものとして描くのかというジレンマに直面した。序文では、この研究に関して自分の立場について詳細に述べ、また“ネーティブ”、“インサイダー”、または“アウトサイダー”としての自分の地位について論じる。全体的にはこの章は、本研究の主旨と、なぜ私がこの研究に着手したかについて述べる。続く第一章ではこの研究の焦点と使用した方法論について詳細に述べる。

一次資料を集める際に、タパーを訪問し、その地でフィールドワークを行った。質問のタイプを標準化し、後で一括して分析できるように自由回答式のアンケートを使った。それに加えて、共同体において行われた行事（特に、結婚儀式、清明節、タイ・パック・クン祭りなどの主要なもの）に参加して、行事がどのように執り行われるか観察した。私の研究には制約があり、それは女性とやりとりしなければならないのに、非常に強い父系共同体と直面した状況において生じた問題があった。それは、私が女性のインフォーマントにインタビューしようとしている時でさえ、しばしば男性が前面に出てきたために、一部の人にとっては極めて個人的なことと看做されている結婚についての情報を得るのに最大の障害が生じた。私がこの研究を誠意をもって行っていることに対して共同体から信頼を得るためには、私自身が共同体に同化し、その成員と非常にうち解けた関係を維持する必要があった。

第二章 は主として客家女性に関わるテーマ、社会と家族制度の中での客家女性の位置および地位について概説する。客家は金採掘が回復してきていた 1800 年代にボルネオに大挙してやってきた。そこから、彼らは居留地と、コンシとい

う集団を設立し始め、さらにそれが他の町や産業、特に農業に広がった。世界中の客家には、他の方言集団と区別できる非常に異なったアイデンティティがある。客家共同体の違いと類似性の比較・対照を行ない、そして客家のステレオタイプを構成するものが何であるかを探るために、異なった国のいくつかのケーススタディを検討した。さらにタパーの客家共同体に焦点を合わせて、この居留地の誕生や、人々が移動と行動に関してどのような厳しい規則を課されて強制的に集められたかを裏付けた。これは、フィールドワークからの経験的なデータも含んだ第三章でも扱われている。客家は一般的に非常に勤勉であると看做されていることが分かった。男女間の労働隔離があまりないように見える。男女が等しく野に出て働き、家族と共同体の労働の必要性に貢献しているからである。

研究の主要なテーマの一つは、過去と現在における結婚の家族制度に対する客家女性の認識である。中国系社会は“結婚の六つの儀礼” 特に婚資を強調するが、これは結婚と、花嫁・花婿双方の家族に重大な影響を与えるものである。結婚自体に多くの過程と儀式があり、その過程と儀式が固守される理由は結婚が家族にとって重要な行事であるからというばかりでなく、花嫁が“サット”を持っているという信仰があるからでもある。彼女は信仰上、非常に強い力を持ち、しかも汚すものでもあると言われている。これらは、タパーからの事例に基づいて第四章と第五章で論説する。結婚は女性の人生にとって最も重要な出来事である。結婚は娘を別の家族の一員に変え、そのようにして彼女が生まれた家においての一時的身分から恒久的な居住を与えるものである。彼女は自分自身の母系単位を構成するが、また姑の母系単位の一因にもなる。結婚後初めて彼女は人生の中でより高い地位を得るが、その間も継続して自分の兄弟と出生以来の両親に従属し続ける。

女性の変化の過程は、実際の結婚する日が最も重要である。彼女が実家を出てから新しい家に到着するまでの間、彼女は“（どこにも）属していない”状態にある。これは過渡的で、この段階の花嫁は極めて危険なものと看做される。花嫁は過度な疑いをもって扱われ、花婿の家族によってあらゆる局面において可

能な限り避けられるのである。それ故、花嫁と花婿は、実り多くてうまくいく結婚の祝福を求めるため、祖先崇拝を厳密に遂行しなければならない。それはつまり、結婚を正式に執り行い、祖先の同意を求めるためである。祖先崇拝は結婚儀礼の中の最も重要な局面の一つである。これは共同体の連続性の一つの形であり、家族の家系を継承していくことの重要性を描いている。結局、全成員が自分の祖先の子孫であり、家系を継承する義務があるという結論に収束する。

第六章は花嫁の結婚後の生活について扱う。タパーにおける既婚女性の位置を反映すべく、いくつかのケーススタディを提示する。若い世代の人の方が、結婚後の人生に、より良い選択肢がある。タパーに住まないで、あえて夫と共にほかの場所で働くことにした既婚女性たちもいることが判明した。そのような女性の一部は、結婚前に既に他の国か都市で仕事を持ち、儀式上は花婿の家族に嫁入りしたが、その子供たちは花婿の母親ではなく女性の母親に面度を見てもらっていた。過去と比べて、既婚女性と出生家族の間にも、より多くの接触がある。より良い通信ネットワークの普及により既婚女性と出生家族の間に密接な融合が可能になっている。今では、過去と比べて明らかに母親と既婚の娘にはより多くの接触がある。

タパーでは、結婚における仲介者としての仲人の役割は極めて重要である。通常、媒介者の役は女性が引き受けるのだが、ここでは例外的存在であると考えられる男性媒介者について述べる。第七章では男性媒介者の共同体の中での役割と地位について描写する。現代では、仲人の関与は実に驚くべきことである。タパーでは、仲人は、二人の男女を仲介、または結婚に関する仕事を遂行するために、結婚にとって不可欠な存在である。男性媒介者は、その役割に精通しているので、実際結婚儀礼を行うのにますます必要とされている。仲人の結婚儀式への関与が近い将来徐々になくなっていくことは現時点では予見できないが、このことはタパーにおける結婚儀礼の興味深い特徴の一つであることに変わりはない。